

分析報告書

-学業成績優秀者賞受賞者のプロフィール化-

要旨

2021 年度から 2024 年度に一定水準以上の GPA スコアを達成し、学業成績優秀者賞を受賞した学生（卒業生含む）を対象に、入試・学業・諸活動・性格的要素等の各データを統合して分析した。その結果、受賞対象者は高校時から学習習慣が確立され入試結果も上位 25% に位置し、入学後は専門ゼミに所属して高い出席率を維持しながら卒業要件を大きく上回る単位を取得していたことが明らかになった。本報告書では、これらの知見を七つの観点から受賞者像としてのプロフィール化を行った。

はじめに

大学におけるエンロールマネジメント（Enrollment Management：以下、EM）とは、学生の募集広報、入学者選抜、教学マネジメント、各種学生サービス、卒業と卒業後の大学評価に至るまで、学生のライフサイクルやエコシステム全体を戦略的に管理する包括的なアプローチである。この EM は、大学における持続可能な運営と教育成果の最大化を目指す上で、極めて重要な枠組みとして位置付けられている。EM の主要構成要素としては、以下の 6 点が挙げられている。①戦略的計画、②マーケット分析、③学生募集および選抜方法の設計・実行・検証、④学生の定着を促進する各種支援策（除籍・中途退学の予防、早期警告システム、個別支援など）、⑤学生の学修成果やキャリア形成を通じた質保証の取り組み、⑥データに基づく意思決定を可能とする分析機能である。

本学では学長室や各委員会等が主体となり、学生の学修や進路等に関する調査を個別に実施してきたが、人物を特定して複数年にわたって追跡するパネル調査や異なる調査結果を名寄せして統合した分析はこれまで実施されてこなかった。そのため、以下のような EM における基幹的な問いに対して、体系的な知見が蓄積されていないのが現状である。すなわち、「特定の学生はどのような高等学校から、どのような選抜制度を通じて入学しているのか」、「在学中にどのような支援サービスや学習機会を活用し、自己成長を実現しているのか」、「高い GPA スコアを獲得している学生にはどのような特徴が見られているのか」、「大学生活を通じてどのような社会人基礎力を身につけ、希望する進路を実現しているのか」、さらには「卒業時に大学に対する高い満足度を示しているのはどのような学生なのか」といった問いである。

こうした状況を踏まえ、今回の調査では 2021 年度から 2024 年度の 4 年間にわたり、一定水準以上の GPA を達成し「学業成績優秀者賞」を受賞した学生（卒業生含む）を対象とし、在学中に回答した複数の調査データを、学籍番号等を用いた統合分析（パネル調査的手法）により分析を行った。これらの分析を通じて学業成績優秀者賞受賞者のプロファイル化を試み、彼ら／彼女らがどのような活動を通じて Student Success（学生の充実した学びと成長）を実現しているのかを明らかにする。本報告書では、まず入学前の高校要因・個人要因と入試との関係を明らかにしたうえで（1.入学前要因の分析）、入学後の学修状況と学生生活を検証し（2.入学後要因の分析）、続いてパーソナリティや社会人基礎力といった内的要因を分析する（3.内的要因の分析）。さらに卒業後の進路を検証し（4.進路の分析）、これらを統合した受賞者像を示したうえで（5.プロファイル化）、これらを総括する（6.まとめ）。

今回の分析結果は、在学生が目指すべき学生像である学業成績優秀者賞受賞者像を、入試結果、学修データ、各種活動データ、性格的要素、就職先データから明らかにするものであり、今後本学における EM の①戦略的計画、②マーケット分析、③学生募集・選抜、④学生定着支援、⑤学生質保証の各領域に対して、実証的な知見を提供することが期待される。

1 入学前要因の分析

1.1 高校要因、個人要因（入学前）の概要

出身高校要因と大学入学前の個人要因を集計した。まず、高校要因においては、出身高校の所在地で最も多いのは東京都(45.7%)、次いで神奈川県・埼玉県・千葉県グループ(25.7%)、北関東甲信越静岡グループ(22.9%)、その他(5.7%)の順となった。これを高校の設置区分でクロス集計すると、東京都出身者の大半(81.3%)が公立高校出身であった。神奈川県・埼玉県・千葉県グループおよび北関東甲信越静岡グループでは、公立・私立がほぼ拮抗する結果となった。高校の出身学科と課程のクロス集計をみると、全日制出身者に限ると普通科が64.5%、商業科が16.1%、その他学科が19.4%となった。次に、大学入学前の個人要因を集計した。高校3年間の平均評定値は3.92、高校の平均欠席日数は16であった。なお、入学手続きした選抜制度を面接系（総合型選抜、学校推薦型選抜＜公募制、指定校制等＞）、入学手続きした選抜制度を一般系（一般選抜、共通テスト利用方式）で集計した結果、前者は15名、本学のOC参加平均回数は1.7（最大3）であった。一方、後者は20名、本学のOC参加平均回数は0回であった。また、選抜試験の結果を見ると、面接系手続き者の面接・課題・小論文の試験結果の順位は上位25%に位置していた。一方、一般系の筆記試験結果の平均順位も上位25%に位置していた。これらのことから、公立系高校、私立高校の全日制出身者の割合が高いこと。試験結果も上位25%にしっかりと入っていることが分かった。

1.2 入試区分別の学修状況等

対象者を入試区分ごとに、人数と構成割合、高校評定平均値、高校欠席平均日数、入学後のGPA平均値、課外講座利用率、クラブ所属率、学友会所属率、上場会社就職率を集計し

た。まず、人数が最も多い入試区分は一般選抜（37%）、学校推薦型選抜（29%）、共通テスト利用方式（20%）、総合型選抜（14%）の順となった。次に、高校評定平均値は、総合型 4.6、学校推薦型 3.9、一般選抜 3.7、共通テスト利用方式 3.6 となり、面接系の入試区分において高い値を示した。また、高校欠席平均日数は、学校推薦型が最も低い日数を示した。GPA 平均値は、いずれの入試区分も 4.9 台の高い数値を示し、区分間の差はほとんど見られなかった。課外講座利用率は一般選抜と学校推薦型で高く、総合型と共通テスト利用方式ではやや低い傾向を示した。クラブ所属率・学友会所属率は、いずれも総合型で最も高い傾向を示した。最後に、就職先が上場会社である者の割合は、学校推薦型と総合型でやや高い傾向を示した。

1.3 入学前要因と入試・入学後の学修・学生生活との関係性

まず、高校要因や入学前の個人要因と入試との関係性を分析した。その結果、出身学科（普通科・商業科）と面接系入試の利用の相関がやや高いこと（ $r=.657, p=.001$ ）。高校の評定と筆記試験の順位に相関がややあること（ $\beta=.394, R^2=.155, p=.047$ ）。同じく、高校の評定と面接試験の順位に相関がやや高いこと（ $\beta=.646, R^2=.418, p=.017$ ）が明らかになった。次に、入学後の学修や学生生活への影響については、面接試験の順位の高さが入学後の GPA の強い影響を与えている（ $\beta=.807, R^2=.651, p=.009$ ）。一方、筆記試験の順位の高さは入学後の GPA（ $\beta=.351, R^2=.123, p=.073^+$ ）には 10% で有意であったため統計的には限定的な影響であることが明らかになった。高校の評定の高さが OC 学生スタッフ活動に相関があること（ $r=.437, p=.012$ ）、高校の評定の高さと TA 活動にやや相関があること（ $r=.351, p=.042$ ）。高校の評定の高さとゼミ所属にやや相関があること（ $r=.394, p=.021$ ）、高校の評定の高さとクラブ所属にやや相関があること（ $r=.367, p=.033$ ）、高校の平均欠席日数と学友会所属に相関があること（ $r=.445, p=.010$ ）が明らかになった。最後に、大学入学前の OC 参加回数と入学後の OC 学生スタッフ活動の関係については、OC 参加回数が多いほど、入学後の OC 学生スタッフ活動への参加との相関があること（ $r=.457, p=.006$ ）が明らかになった。

2 入学後要因の分析

2.1 成績・単位・ゼミ出席率

学業成績優秀者賞受賞対象者の成績、単位、ゼミ出席率をそれぞれ集計した（在学生は除外）。所属ゼミの有無は、ほぼ全員（97%）が専門ゼミに所属しており、所属ゼミの 4 年間の平均出席率は 96.4%、平均 GPA 値は 4.92 であった。なお、成績は次の通りである。A の平均獲得数は 48.8、A の平均獲得数は 11.8、B の平均獲得数は 3.5、C の平均獲得数は 1.2、D の平均獲得数は 0.3、平均総取得単位数は 136.3 となった。卒業に必要な単位数が 124 のため、12.3 も多く単位を取得している結果となった（教職課程履修者を含むため、平均が押し上げられている点には留意が必要である）。この結果からは単に単位を多く取得し

ているだけではなく、非常に高い成績を残していることが分かった。次に、これらの成績と総取得単位数の関係性を相関分析した。その結果、総取得単位数と成績（A A）の獲得は相関があった（ $r=.495, p=.000$ ）。総取得単位数と成績（A）の獲得はやや高い相関があった（ $r=.647, p=.000$ ）。一方、ゼミ出席率の高さと成績（B）の獲得は負のやや低い相関であった（ $r=-.365, p=.043$ ）。ゼミ出席率の高さと成績（C）の獲得も負の相関であった（ $r=-.514, p=.000$ ）、ゼミ出席率の高さと成績（D）の獲得も負のやや高い相関であった（ $r=-.688, p=.000$ ）。ゼミで高い出席率を維持している学業成績優秀者は、低い成績を回避しながら、単位数の増加と高い成績を実現している傾向が見られた。

2.2 手続入試区分間の比較：GPA・卒業時満足度への影響

対象者が手続した入試形態を、面接系（総合型、学校推薦型の合計）と一般系（一般選抜、大学入学共通テスト利用方式の合計）に区分し、入試区分間における入学後の GPA、卒業時満足度、総取得単位数への影響を、ステップワイズ法による重回帰分析を行った。最初に、目的変数を GPA、説明変数を大学入学前の個人要因（高校評定値、高校欠席日数、面接系・一般系の入試結果順位）、高校要因（所在地、設置区分、課程、学科）、入学後の個人要因（留学経験、課外講座、課外講座試験結果、OC 学生スタッフ活動、表彰制度、TA 活動、ゼミ出席率、総取得単位数、クラブ所属、学友会所属、学生相談室利用、学内就職セミナー参加率、学内選抜インターンシップ参加）とした。分析の結果、面接系手続者の GPA への影響には、面接系入試結果順位（ $\beta=.857, p=.001$ ）、クラブ所属（ $\beta=.858, p=.001$ ）、高校設置区分（公立系）（ $\beta=.628, p=.009$ ）の 3 つの変数が有意となった（ $R^2=.965, \text{adj}R^2=.943, p=.001$ ）。一方、一般系手続き者の GPA に影響を与える変数は導出できなかった。次に、目的変数を卒業時満足度、説明変数を上述のものを利用して分析を行った。その結果、面接系手続者の卒業時満足度へは総取得単位数（ $\beta=.959, p=.001$ ）のみが有意となった（ $R^2=.92, \text{adj}R^2=.907, p=.001$ ）。一方、一般系手続き者の卒業時満足度への影響は、学内選抜インターンシップ参加（ $\beta=.873, p=.001$ ）のみ有意となった（ $R^2=.762, \text{adj}R^2=.732, p=.001$ ）。いずれも高い影響を示している結果となった。

2.3 学生生活と満足度（n=32）

続いて対象者の各種学生活動と満足度の関係性を分析した（在学生は除外）。まず、学友会への所属は、TA 活動（ $r=.347, p=.041$ ）と総取得単位数（ $r=.359, p=.034$ ）にそれぞれ正の相関を示した。学友会に所属することで交友関係が広がり、その結果 TA の活動に参加する情報や機会を得たり、履修しやすい授業科目の情報等が共有できたりすることで総取得単位数にも肯定的な影響を示していることが伺える。次に、課外講座の利用は、課外講座の結果（合格など）（ $r=.653, p=.001$ ）と表彰制度（ $r=.405, p=.016$ ）にそれぞれ正の相関を示した。課外講座に複数回参加することで、結果（合格）も獲得しやすくなるため、表彰制度を受ける機会にもつながっていることが伺える。次に、OC 学生スタッフ活動においては、

OC学生スタッフ活動と学生生活の満足度に正の相関を示した ($r=.368, p=.030$)。最後に、学生相談室の利用は、学生生活の満足度との相関は統計的に有意ではなく ($r=-.354, p=.053$ †)、総取得単位数へは正の相関 ($r=.491, p=.004$) が見られた。学生相談室の利用が、総取得単位数に肯定的な影響を与えたことが示された結果となった。

2.4 学生生活と総取得単位数・GPA、奨学金利用と満足度

次に、対象者の各種活動と総取得単位数とGPAの関係性、および奨学金利用と満足度との関係性を分析した(在学生は除外)。最初に、目的変数を総取得単位数、説明変数を入学後の個人要因(留学経験、課外講座、課外講座試験結果、OC学生スタッフ活動、表彰制度、TA活動、ゼミ出席率、クラブ所属、学友会所属、学生相談室利用、学内就職セミナー参加率、学内選抜インターンシップ参加)を用いて、ステップワイズ法による重回帰分析を行った。その結果、学生相談室の利用 ($\beta=.521, p=.001$)、学友会所属 ($\beta=.399, p=.011$) がそれぞれ有意となった ($R^2=.402, \text{adj}R^2=.359, p=.001$)。学生相談室の利用、学友会所属によるメリットにより総取得単位数に肯定的な影響を与えることが明らかになった。次に、目的変数をGPAとし、説明変数と分析方法を上述と同様に実施した。その結果、課外講座 ($\beta=-.481, p=.006$) のみが有意となった ($R^2=.231, \text{adj}R^2=.205, p=.006$)。課外講座の利用が少ないほど、学修に割く時間を増加させることができるため、GPAに負の影響を示す結果となった。次に、奨学金の利用と満足度との関係性を相関分析した結果、奨学金の利用と卒業時の大学満足度 ($r=-.44, p=.036$)、卒業時の学部満足度 ($r=-.55, p=.006$) との間にそれぞれ有意な負の相関がみられた。

2.5 在学中の悩みと相談相手

在学中の悩みと、悩みを誰と相談するかについての傾向を明らかにするために回答結果を集計した(分析対象者を全員としている)。まず、「在学中の悩み」については、「将来の仕事」が最も多く37%、次いで「悩んでいることはない」14%、「授業・単位・成績」と「学内の友人関係」がそれぞれ11%、その他9%の順となった(複数回答可)。次に、「悩みを誰に相談するのか」については、「友達」31%、「家族」29%、「大学教員・職員」25%、「相談しない・その他」15%の順となった。

2.6 大学への要望

対象者が大学に対してどのような要望を持っているかを集計した(分析対象者を全員としている)。まず、要望の各項目を、次の4つのカテゴリーに分類した。①施設・設備を「大学ハード面」。②課外講座、就職支援、大学広報、図書館利用制度を「大学サービス面」。③パソコン教育、教養教育(授業)、外国語教育、専門教育を「大学ソフト面」。④教員の研究活動を「教員面」。集計の結果、最も多かったのは「大学ソフト面」(55%)。次いで、「大学サービス面」(25%)、「大学ハード面」(14%)、「教員面」(6%)の順となった(複数回答

可)。学業成績優秀者は、教育の質的向上に対する関心が高く、カリキュラムや授業内容の充実といった要望が強いことが明らかになった。加えて、課外講座や就職支援を含む各種サービスへの期待も一定程度存在することも明らかになった。

2.7 大学内部要因（施設・設備）と満足度

大学の内部要因となる学修用施設・設備の満足度、および学修以外の施設・設備の満足度と、学生生活の満足度の関係性。そして、他者への推奨について関係性を分析した（在学生は除外）。その結果、「学修用の施設・設備の満足度」と「学修以外の施設・設備の満足度」は正の相関を示した（ $r=.673, p=.002$ ）。「学修以外の施設・設備の満足度」と「学生生活の満足度」も正の相関を示した（ $r=.65, p=.003$ ）。なお、「学修用の施設・設備の満足度」と「学修以外の施設・設備の満足度」はいずれも「他者への推奨」とは相関を示さなかった。次に、卒業時の「大学満足度」、「学部満足度」、「他者への推奨」の関係性について分析をおこなった。その結果、「大学満足度」と「学部満足度」は正の高い相関を示した（ $r=.753, p=.000$ ）。次に、「他者への推奨」に対する「大学満足度」と「学部満足度」への影響をステップワイズ法による重回帰分析を行った。その結果、「大学満足度」（ $\beta=.674, p=.016$ ）のみ有意となった（ $R^2=.455, \text{adj}R^2=.4, p=.016$ ）。学修用施設と学修以外施設の満足度はいずれも高く、卒業時における大学全体の満足度と学部全体の満足度も高い相関を示していた。

3 内的要因の分析

3.1 パーソナリティ特徴 その1：リーダーチャート

学務部就職支援課が使用しているキャリアデザイン支援ツール（以下、支援ツール）に回答記録が残っていた学業成績優秀者賞受賞者を分析対象とし、個人の内的要因であるパーソナリティ（性格的要素）に着目し、傾向を明らかにするものである。支援ツールはさまざまなキャリア意識や行動に関連する質問項目から構成されているが、そのなかの一つに「パーソナリティの特徴」を測定する箇所がある。具体的には、①現実（地に足のついた発想をする）—想像（独創的・創造的な発想をする）、②柔軟（臨機応変に対応する）—几帳面（決められた計画をやり通す）、③マイペース（自分のペースを崩さない）—努力志向（大きな目標に向かって努力する）、④内向的（物静かで控えめな行動をとる）—開放的（初めて会う人にも物怖じしない）、⑤リラックス（緊張やストレスに強い）—心配性（不安を感じることで行動する）、⑥冷静（感情に流されずに行動する）—共感（人に思いやりを持つ）がある。これらのなかで自分がどこに位置しているのかを10段階のなかで回答し、結果が表れるものである。最も顕著であったのは、「心配性」（ $M=8.7$ ）となった。次いで、共感（ $M=6.8$ ）、几帳面（ $M=6.3$ ）となり、次いで、現実／想像、マイペース／努力志向、内向的／開放的はやや中立的な結果となった。

3.2 パーソナリティ特徴 その2：関係マップ

パーソナリティ特徴その1で使用したデータをもとに、SPSSによる関係マップ分析をおこない、学業成績優秀者の人物像を導出した。分析の結果、3名の典型的なペルソナを導出した。①第1のペルソナは、几帳面で共感的、心配性なところもあるが、自分なりに努力を続ける、周囲に配慮できる誠実な人物である。②第2のペルソナは、自分のペースを大切に、創造的な活動を好む自由な感性の持ち主。表現力があり、人と違う視点を持つが、こだわり過ぎず柔軟に動ける人物である。③第3のペルソナは、冷静に物事を判断し、自分の内面と向き合う落ち着いた性格。多くを語らず、周囲を観察し、必要な時に柔軟に考えを広げられる開放的な知性の持ち主である。

3.3 身に付けた社会人基礎力

回答記録が残っていた対象者のデータを用いて、4年間の大学生活で獲得した社会人基礎力の診断結果を集計した。その結果、平均値(M)のスコアが上位(M=5.8以上)であったのは、規律性(チームで働く力)M=6.9が最も高く、次いで、柔軟性(チームで働く力)と状況把握力(チームで働く力)がいずれもM=6.6を示し、次いで計画力(考え抜く力)M=6.4、傾聴力(チームで働く力)M=5.8が上位5つを占める結果となった。次に、同スコアが中位(M=4.8以上5.7以下)は、実行力(前に踏み出す力)と課題発見力(前に踏み出す力)がともにM=5.7、発信力(チームで働く力)M=5.1、働きかけ力(前に踏み出す力)M=4.8の順となった。スコアが低かったのはストレスコントロール(チームで働く力)M=3.7、主体性(前に踏み出す力)M=4、創造力(考え抜く力)M=4.1であった。これらの結果、「チームで働く力」「考え抜く力」に関連するものに、規律を守り、柔軟に計画を立てられる点が強みであることが示唆された。一方、積極的に動いたり、意見を発信したり、他者に働きかけたりする「前に踏み出す力」にやや苦手意識が見られる傾向があると考えられる。

3.4 大学満足・不満足の原因と大学でできたこと(自由記述)

学生委員会および学務部学生課が2021年度と2023年度の隔年で実施した「学生生活満足度調査」における「総合的に見てあなたは学生生活に満足していますか」の回答理由を書く自由記述欄、および学長室が過去4年間実施していた卒業時アンケートにおける「大学でできたことは何ですか」の自由記述欄の二つを分析対象とし、両者の自由記述内容を統合した上でRを用いてワードクラウドによるテキストマイニング分析を行った(図表1)。ワードクラウドとは、単語の出現頻度に基づいて単語を視覚的に表現する手法であり、出現頻度が高い単語ほど大きなフォントで表示され、視覚的に注目すべきキーワードが一目で把握できる点が特徴である。

分析の結果、最も大きく表示されている単語は「活動」と「満足」の2語であった。これからは、大学生活における様々な「活動」に「満足」していることが読み取れる。また、「授業」「ゼミ」「知識」「経験」「就職」「資格」「挑戦」といった単語も比較的大きく表示されており、学生生活を通じて達成感や充実感を得ていたことがうかがえる。一方、「コロナ」

「不安」「不便」といった単語も出現しており、調査対象期間がコロナ禍と重なっていたことを踏まえると、感染症拡大に起因する困難が学生生活における不満足要因の一つとして認識されていたことが示唆される。

図表 1：ワードクラウドの分析結果



4 進路（就職等）の分析

4.1 就職先

卒業した対象者の進路先を集計するとともに、就職に関連する在学中の各種活動および就職結果と、大学に対する満足度との関係性を分析した。大学進学のための一つの目的として就職が挙げられることを踏まえ、在学中の活動が就職という成果に結びつき、それが大学・学部への満足度向上につながる、という一連の仮説を検証した。まず、民間企業に就職した者は全体の78%となった。内、上場会社へは民間企業就職全体の28%、従業員数1,000名以上の企業就職は同44%となった。次に、民間企業以外の進路先を見ると、資格取得等の準備に専念した者が全体の13%、その他の進路（教職、大学院進学等）が全体の9%の順であった。

そこでここでは、①各種活動（就職行事参加率、学内選抜インターンシップ参加）と就職先（上場会社就職、売上、従業員数）の関係性、②就職先（上場会社就職、売上、従業員数）と大学や学部の満足度等の関係性、の2点を分析した。①の分析の結果、「就職行事参加率」と「上場会社就職」「売上」「従業員数」との間に相関は見られなかった。また、「学内選抜インターンシップ参加」と「上場会社就職」「売上」「従業員数」との間にも相関は見られなかった。コロナ禍で就職行事の減少・変更・中止等が発生した結果、影響が表れにくくなっている可能性が示唆される。②の分析の結果、就職先（上場会社就職、売上、従業員数）と「大学満足度」「学部満足度」「学生生活の満足度」「他者への推奨」との間にも相関は見ら

れなかった。さらに就職先の 3 つの変数を合成変数化した上で説明変数として設定し、満足度を目的変数として共分散構造分析も行った。その結果、就職先（合成変数）から大学に対する満足度（ $\beta = .968, p = .483, n.s.$ ）、学部に対する満足度（ $\beta = .781, p = .485, n.s.$ ）、学生生活の満足度（ $\beta = .723, p = .485, n.s.$ ）、他者への推奨（ $\beta = .359, p = .516, n.s.$ ）のいずれについても、統計的に有意な関連は確認されなかった。 β 係数の絶対値は総じて大きいものの、サンプル数が限られることによる推定の不安定性を踏まえると、この結果をもって関連性の有無を断定することは難しい。以上の結果から、就職先の企業属性と、就職支援サービスの利用や大学に対する満足度との間には、単純な線形の関連性は確認されなかった。これは、就職の満足度が企業属性（規模や上場の有無）のみでは説明しきれない、学生個々の志望動機や適性とのマッチング度合いなど、他の要因によって左右されている可能性を示すものと考えられる。なお、対象期間がコロナ禍と重なり就職行事の実施形態が大きく変動していたこと、また対象数が限られることから、両者の関係性については引き続き検証していく必要がある。

4.2 上場会社就職の決定木分析

上場会社へ就職を果たした卒業生を分析対象とし、上場会社への進路に影響を与える要因を明らかにするため、R による決定木分析を行った。分析の結果、留学経験、ゼミ活動への注力、課外講座の複数回受講、学内選抜インターンシップへの参加といった要素が、上場会社への就職と一定の関連を持つ傾向がみられた。ただし対象数が限定的であることに加え、決定木分析は少数サンプルでは特定の事例に適合しやすい特性があるため、本結果はあくまで参考的な知見として捉える必要がある。

5 学業成績優秀者賞受賞者のプロフィール化

これまでの分析を通して、学業成績優秀者賞受賞者の人物像を、以下の通りプロフィール化した。①入学前の個人要因では、しっかりとした学習習慣を持ち、入試では上位 25% 以内の成績を収める受験生であった。高校の平均評定値は 3.9 以上、3 年間の平均欠席日数は 16 日である。都内と神奈川・埼玉・千葉・北関東・甲信越静岡の公立系高校、そして神奈川・埼玉・千葉・北関東・甲信越静岡の私立高校の割合が高い傾向にあった。②入学後の授業・ゼミでは、専門ゼミに所属し、高い出席率を維持している。成績評価は B・C・D から A・A・A へとシフトする傾向にあり、これに伴い総取得単位数も増加している。総取得単位数の平均は 136.3 単位であった。③学生生活では、学友会所属、TA 活動、OC 学生スタッフ活動などの参加者は、総取得単位数や学生生活満足度との間に肯定的な関連がみられた。課外講座も複数回参加するほど、資格試験等の合格という結果が出やすい傾向にあった。④パーソナリティ（性格的要素）では、ペルソナ 1 として几帳面で誠実な努力家、ペルソナ 2 として自由で創造的な柔軟派、ペルソナ 3 として冷静で内省的な知性派という 3 つの傾向が見出された。⑤大学内部要因（施設等要因）では、学修用および学修以外の施設・設備の利用機

会が学業成績優秀者に多くあり、利用頻度に応じて評価（満足）も高まる傾向がみられ、大学全体や学部に対する満足度とも関連していることがうかがえる。⑥大学生活を通して身に付けた社会人基礎力は、「チームで働く力」と「考え抜く力」が上位となり、なかでも規律を守り、柔軟に計画を立てられる点が強みとなっている。一方、積極性や意見の発信、他者への働きかけといった「前に踏み出す力」に苦手感が生じていた。⑦就職活動・進路（就職等）では、上場会社や従業員 1,000 名を超える企業への進路先を実現している一方で、資格取得等の準備に進む学生も一定割合存在していた。上場会社への就職に向けては留学参加、ゼミ出席率の高さ、GPA の高さ、課外講座の受講、学内選抜インターンシップへの参加がポイントとなっている。

6 まとめ

本分析では、部署等を横断的に保有されているさまざまなデータを I R 室にて収集・分析することにより、学業成績優秀者賞受賞者のプロフィールの一部を明らかにすることができた。得られた知見は、今後の入試制度設計や学生指導など、エンロールマネジメントの各領域における活用が期待される。

おわりに

本報告書では、①入学前要因の分析から、受賞者が高校時より学習習慣を確立し、入試結果も上位に位置していたこと、②入学後要因および内的要因の分析から、専門ゼミへの所属や各種課外活動への参加が学修成果や学生生活の満足度と肯定的な関連を持っていたこと、③進路の分析から、多くの受賞者が上場会社や大手企業への就職を実現する一方、就職先の属性と満足度との間には明確な関連が確認されなかったことを示し、これらを七つの観点（入学前の個人要因、授業・ゼミ、学生生活、パーソナリティ、大学内部要因、社会人基礎力、就職活動・進路）から受賞者像としてプロフィール化した。本報告書で得られた知見は、今後の入試制度設計や学生指導をはじめとするエンロールマネジメントの各領域における意思決定を支える、重要な基盤となるものである。